

「こんなに悲しいゾンビはいない」 近藤 都

ハイチの離島に住む裕福な家庭、ホランド家の長男ポールの妻ジェシカは精神疾患を患っておりその実はゾンビである。彼女の療養のため専属看護婦として雇われたベッツィ。彼女はこの島でゾンビとその誕生に関わる悲しい兄弟のメロドラマを知り、さらには自分もその三角関係に介入していく。

まず、本作でのゾンビが『バイオハザード』（2002）に登場するような奇声をあげながら人を食う危険生命体とは違うということを押さえておきたい。ここでは植民地時代の奴隷貿易によって迫害を受けた人々が生んだブドゥー教に存在する一種の習慣としてゾンビがいる。彼らは呪術師によって操られるがままにただ歩き、囚われの象徴として存在する。この“囚われ”は一つのキーワードとして作中の土台となる。皆、女性や酒、人種に宗教、総じて過去、何かしらに囚われている。故にゾンビへの抵抗や危険意識ではなく、その周囲にある人間の愛憎感情や潜在的な人種問題に焦点があてられている。

ホランド家はかつて黒人奴隷を連れて島を開き、その過去の形見として屋敷の入り口には複数の矢が刺さった奴隷の船首像が飾られている。この象徴的な像に加え島の二大組織、白人からなるホランド家と黒人発祥のブドゥー教の信仰者という構造が人種的な側面へと導いていく。

ホランド家はポールが表向きの長であるが、実権はホランド夫人にある。彼女はベッツィを利用し、弟の酒癖を正そうとする。街で弟が酔いつぶれベッツィが帰るよう促していると、黒人の歌い手が現れた後抜群のタイミングで夫人が登場する。居間の酒を隠すようポールに意見してほしいと彼女に頼み、結果兄ポールは渋りながらも了解し、最終的には夫人の思い通りにことが運んでゆく。真相の露呈もいささか仕組まれているような気がする。ジェシカは昔、弟と恋仲になり家を出ようとしたが、ポールにいかにもゴシックホラー的な石造りの閉鎖的な建物に幽閉され、文字通り囚われの身となり、それが原因でゾンビと化してしまったのだ。これは先ほどの黒人の歌い手による歌によって暴かれる。

またブドゥー教への誘導にも一枚噛んでいる。ショック療法でも治らないジェシカを助けようとベッツィは使用人からブドゥー教の存在を教わり夜な夜な彼女を連れ出す。二人の風に揺れるドレスに誘われて私たちがさとうきび畑の奥のブドゥー教の本拠地に導かれる。

こちらは神からの言葉の代弁者、呪術師、信仰者、ゾンビという大まかな枠組みが存在している。この頂点、代弁者は驚くことにホランド夫人である。つまり、二つの組織の頂点が同一であり家主と使用人という白人と黒人の関係と同時に奴隷の因果関係によって生じた宗教にも白人が介入し、しかも頭を張っているのである。一

見黒人の歌い手によって白人の過去が暴かれ、白人が黒人の宗教に助けをこうという逆転的な状況に思えるが裏で操っているのは呪術師ではなく白人である夫人なのだ。するとこれまでの過去の真相やブドゥー教への助言も全て彼女が黒人を使って導いているのではないかと思えてしまう。こうしたゾンビによる恐怖ではなく、潜在的に潜む人間の関係性、人種的な囚われと感情的な囚われが重なり合うことで紡がれる悲しい怖さがある。

だが、さらに怖いのはこの一連の流れの中で結局夫人もブドゥー教も何をしたかったのかがわからない点だ。

怪談では明確な因果関係による復讐が、『リング』(1998)に代表されるようなJホラーではある種の法則性のようなものが存在し幽霊と戦い、理解する姿勢が取られる。前者では大きな結果の下個々に起こる事象が説明され後者では個々の事象から徐々に全体像がわかり、法則が生み出される。しかし、今作では個々の因果関係、三角関係の末に家族が破綻し、そこへキリスト教圏から来た一人の女性が今度は四角関係へと発展させる。その全体にホランド夫人が関与しているというエピソードは理解しやすい。だが、その末の目的、全体像は掴めない。最後には自分の息子が死に至る事態を引き起こしてしまう点も解せない。そうするとホランド夫人の思惑であったのかすらも疑わしくなってくる。

過去の回想シーンがなく、あくまで個人の証言からしか想像できない点、ベティの回想形式で始まり謎の人物によって語り終えられる違和感、植物の影が顔に重なる黒白の陰影の美しさにオフスクリーンから不気味に鳴り響く太鼓の音、呪術シーンの並行モンタージュによるブドゥー教の不穏さの煽り。これらのゾンビの怖さではない不明確な怖さ、個々のエピソードをたどっても全体が見えない不気味さが見終えた時にじわーっと広がる。

ターナーの呪術にかけられたとでもいうべきか、ゾンビにおわれるのではなく、ゾンビに誘われ導かれる。そして悲しく切ない愛憎劇、長い人種の壁を私たちは目の当たりにする。こんなに切ないゾンビの話はない。